

水戸街道を通じて東京との自動車交通は活発化しているが蔬菜の出荷とは縁がない様である。一面の旱場米地帯でもあり、労働力需要の *Peak* が画一的であり、機械力の導入をはじめ労働効率の高産化が最近急速に促進され畑地の陸田利用、畜産の導入など安定した農業生産に移行する傾向が表われている。

従って蔬菜栽培に対する土地条件の有利性が今後どの程度まで積極的に利用されるかは予測しがたい。又、調査地域は東関東的という形容に該当する水田単作地であり、県全体の二毛作利用が早期栽培の普及と共に後退的であるという点から、従来の夏作利用に対する考え方——麦、なたね作等では当地域においても二毛作化は余り考えられない。土地利用の変化についてはむしろ河成段丘及び台地面の輕鬆土畑地帯に於て、社会的要求に促された転換の可能性の方が大であろうと推察される。現在はこの土地を“野方”と呼び蔬菜栽培に関して“下”に対し *Complex* を持ち概して甘藷——麦の単純な輪作形式がとられている。

いずれにしても労働力需要の面で他産業との競合という社会的条件が様々な形で地域の農業的土地利用の発展的方向を規定するであることは否めない。今後の動向についてはあくまで将来の現実のみが答え得ることであり、私の推察可能な域ではないと痛感させられたのも調査地域の地理的條件の複雑さを物語るものでもある。まさに生の現実に接して時局に即して物を考えることができたのは私にすぎた素と云えるであろう。

巡 検 記

富 岡 巡 検

4年（昭和34年度生）

「式先生の巡検は大変よ、相当下調べしていかないと夜寝かせてもらえない事になるわよ」と上級生から有難いご注意を受けてはいたのだが、皆試験中の緊張がぬけたせいで毎日ボーッと過してしまい、一、二の勉強家を除いてはその前日迄研究室に現われる者がなく、多いに先生を嘆かせた私達ではあった。

それでも当日は持ちまへの心臓で11人が参加、それに先輩の鈴木さんが加わった。11時08分高崎着、駅前に横づけされた県のマイクロバスで先

ずは高崎観音、否富岡丘陵へ。バスといえは観光気分になる我々であるが、地形区分図等が渡されるとハッとして巡検に来ているんだという事を見いだす。とたんに観音さまの顔がポチャッとしているとか、いないとかという話から、あの露頭の巨礫のオリジンは……等とぐつと学問的な話になる。

丘陵上から眺めた妙義山はまさしく鋸歯状の陵線を呈して屋裡「こういう景色を称して幻想的という」とは式先生の御言葉である。丘陵上を一めぐりし鍋川を渡り、古く奈良時代に既に政治の行われた所といわれる多胡卑跡に来た頃はそろそろ日も沈まんとしていた。それでも今日はここが最後というので一同はりきって上州名物の空っ風に吹かれ乍ら石碑に刻まれた文字の解読を試みたが、横文字には強い(?)諸嬢といえども漢文とあつては如何とも仕難く、初めのよ、3行で努力の放棄を余儀なくされた。

翌日も風はおさまらず一日中私達を悩ませた。

近世の城下町と宿場町の両機能をもつという安中町ではその景観や地割に特徴がある。又参考文献によると「この町には明治の初めに新島襄がキリスト教を導入し教会を建ててその伝導につとめた為他の村に比して飲食店が少い」との事であったが、その事はかり気をつけてみていたせいか意外に沢山目について仕方がなかった。

午後は妙義山の麓にまで達しその絶壁と奇岩をまのあたりにみることができた。妙義山は才三紀、中新統といわれる安山岩がその山体をなし、泥岩やロームの堆積を受けその後の開拓により現山の山形となったのであるが、これが噴火当時は成層火山であったという事を想像するのはすこぶる困難であった。兎に角現在は侵蝕段階にある故火山のカテゴリーには入らないという事である。次に鍋川の土地改良を行っている「高崎土地改良鍋川沿岸事務所」といういとも長い名の事務所ではそこで行われている水利事業の話聞いた。ところがこの事業は、10年前に計画されたもので、緑地の水田化が目的であったが最近の食生活改善によりお米の需要が減ってきたのでわざわざ水田に金をかけるのは得策でないという事から現在は工事を途中でストップしているというのである。従つて国から出る工事費用は毎年手をつけずに返上するという、予算獲得に頭を悩ましている人に聞かせたらまさによだれの垂れそうな話であった。

三日目は宿舎の近くにある高崎前橋台地の露頭の観察から、前橋市はその北半を下町、南半を上町といい、下町は利根川の沖積地で、上町は火山屑物からなる台地である。そして、この前橋市の北は赤城火山の麓に形成された白川の扇状地でこの扇状地はその末端の利根川の側侵蝕で作られた崖に新

しい二次的な扇状地を作っている。その日は白川の扇状地の扇頂に近い県立の種畜場を見学した。いや見物した。こゝでは他県からの優秀種の家畜を集めそれらに同じ飼量を与えた結果から何県からのものが最もこの地に良く育つかという実験をしているという事であつた。それをうっかり一頭の豚にだけ紙を食べさせてしまったSさん。あとで気がついて他の豚にもやつて来ようかしらとしきりに心配していた。

動物というものは種類によって性質が実に違う。山羊や牛、馬の様に異様な恰好の女性が十人以上よつてたかつても、しらん顔で身動き一つせずそばを向いているものがあるかと思うと、豚の様に体を柵からのりださんばかりにして鼻をつきだし、寝糞をふりまくものもある。我々はあの鼻をまともにみせつけられてげんぱりしたが、先生は多いに食欲をそそられたそうである。

その晩は吉田先生ともう一人メンバーが加わり話に花がさいた。そこででた話題を一つごひろうすると、わが地理科に是非巡検用のマイクロバスを備えたい、という事である。学校からの援助は見込みがないから、我々の力で買うとすると、卒業生を含めて一人頭いくらだせばよいか、一人2,000円としても30万円は集る等と盛んに皮算用を試みた。それにしても、本当に一台ほしいものである。乗用車でなくバスなら、彼とのドライブにちょっと拝借しよう等という不心得者は現われないうし。

最後の日は沼田まで北上、沼田盆地は旧くは利根川が赤城の火山岩屑の堆積によりせきとめられ湖水を形成していたという所であるが、赤城山の溶岩の下に湖成堆積物のみつかるところもあつて必ずしもそれが定説となつてはいない。という事である。

さてその日は先生のご都合で早く解散という事になつた。いつもの巡検なら必ず他へ足をのばしてゆく者があるのに今回は全員がより道せず家に戻つた。これというのも五日後に追つた鷹ろく程次山の提出物のせいなのである。

山形—秋田（昭和36年7月2日～5日）

3年（昭和35年度生）

この巡検は渡辺先生のご指導のもとに夏休みに入ったばかりの7月2日、山形を皮切りにおこなわれましたが、オノ日目は山形大、長井先生に案内していただき、馬見ヶ崎扇状地の扇頂に位置し古くから城下町として栄えてい